

〔博士論文概要〕

戦後日本における身体美文化に関する系譜学的研究  
—美容体操／ボディビルを通じた主体化に着目して—

令和3年度

竹崎 一真

本研究は、戦争によって焦土と化した日本の首都東京から芽生えた身体美文化をめぐる歴史社会学である。

東京都渋谷区、若者の街として知られるこの街は、戦後、身体美文化の拠点となった。第二次世界大戦での敗戦から10年を経て、焼け野原となった日本が徐々に元の姿を取り戻し始めた頃、この地に身体美文化をめぐる二つの象徴的な空間が誕生した。一つは、新宿に程近い代々木に建設された文化服装学院の円筒型校舎、もう一つは、道玄坂の雑居ビルの中にオープンした日本ボディビルセンターである。戦後になって生まれたこの二つの空間には、若者たちが「新しい身体的理想」を手に入れようとするため、美容体操やボディビルを風景が広がっていた。

本研究が目的とするのは、この二つの身体美文化の形成過程において、身体をめぐる言説がどのように編成されていくのかを系譜学的に捉えることである。そのために本研究では、ミシェル・フーコーの権力に関する系譜学的アプローチを参照し、身体美文化の「由来」と「現出」を記述することに取り組む。フーコーの系譜学的アプローチは、理想的なものとして存在し続けている身体のあり方が、真理ではなく、さまざまな権力関係による偶発的な社会構築物であることを明らかにするものとして用いられてきた。本研究では、フーコーが示した「由来」と「現出」を記述するという系譜学の方法を下敷きとしながら、「美容体操」や「ボディビル」がどのような背景のもと出現したのか（由来）、そして、そうした身体の上で繰り広げられる日本とアメリカという二つの異なる文化の衝突がどのような交渉を生じさせ、戦後日本の身体美文化として位置づくようになったのか（現出）を明らかにしていく。こうした分析を行うことによって、戦後日本に現れた身体美文化が、不均衡な権力関係から生じた文化であると同時に、自己の問い直しを引き起こし続けるアンビバレントな身体文化であることが明らかにすることを目指した。

具体的には以下の作業を行った。第3章「生活革命と女性解放：「八頭身」はいかに生まれたのか」では、「八頭身」という言説・身体イメージがどのような社会的文脈のなかから

生じたのか、その歴史的背景を再構成しつつ、「八頭身」が戦後の女性たちにとってどのような意味を持ったのか、すなわち「八頭身」の由来を考察した。第4章「美容体操の登場と女子体育改革」では、女性が身体美を追求するという行為がいかに関女性たちの規範的な行為として位置づけられていったのか、すなわち権力が身体に書き込まれていく具体的なプロセスについて考察した。第5章「女性解放運動としての身体美文化：身体の獲得と男性社会への抵抗」では、身体美という記号が女性解放という文脈のなかに位置づけられていくのかについて考察した。第6章『『男らしさ』のためのボディビル——男の敗戦経験とその回復』では、日本のボディビル文化が形成する際の中心にいた主要人物たちの語りから、ボディビルという男性身体美文化がどのような過程を経て生じたのか、ボディビルの出現の由来を分析した。第7章「揺れ動く日本のボディビル」では、メディアを通じてボディビルが大衆化し始めて以降のボディビル界の組織的な動きと、ボディビルをめぐる組織内外の言説の動きを考察した。このとき注目するのは、ボディビルというアメリカ的身体がナショナリズムの言説によって言説的に変化する様子である。つまり、アメリカ的身体とナショナリズムの言説との間隙で、新たな男性身体の言説が創出する過程を分析することを本章では行った。第8章「三島由紀夫とボディビル——格闘する主体」では、戦後を代表する文学者であり、ナショナリストと評される三島由紀夫を取り上げ、彼がボディビルを通じていかなる主体を立ち上げていくのかを考察した。本研究において彼を取り上げるのは、彼がボディビルを行うことによって、右派的ナショナリズムの意識を獲得したからである。つまり、三島はアメリカ的身体を欲望することを通じて、ナショナリズムを発露したのである。そしてその身体は戦後日本を生きる人々に欲望されるようにもなった。本章では、三島がボディビルを通してアンビバレントな主体意識を獲得していくのかを確認した。

以上の作業を通じて、以下のことが明らかとなった。戦後日本の身体美文化は、八頭身や逆三角形といったアメリカ的な身体美の理想を追い求める身体実践の文化として生じた。戦後の人々が身体の美しさを求めたのは、それが敗戦によって寄る辺を失った人々にとっての希望となったからであった。戦前の軍国主義下における国家の近代化の過程では、身体のあり様は画一化された。しかし、軍国主義が崩壊した戦後においては、自らが身体の行く末を決めなければならない。その時、戦後を生きる人々のなかから生じたのが、第3章や第6章で確認したような、アメリカ的な身体美を求めることを道標とするようなうねりである。敗戦後の日本において、身体の美醜は、支配者—被支配者の権力関係をアナロジー化した可視的な記号として認識された。そのため、身体を美しくすること、言い換えれば身体をアメリカ的身体へと近づけることが、支配者たる「アメリカ」に近づくと同時に、日本を再生させることに繋がると考えられたのである。

しかしながら、第4章や第7章で確認したように、文化の形成過程において、「日本人」はその身体に「不向きである」、あるいは「なってはならない」という言説が前景化する。このことは、アメリカ的な身体美が日本人の人種性とジェンダーに一貫性のないものの身体実践だという認識が形成されていたことを示すものである。だが、そうしたなかで、身体

美文化を日本的な文脈の中で意味づけし直そうとする動きが現れる。そうした言説は、「日本人」なるものを身体美の側面から再構成するものとして展開し、身体美文化の正当性を担保するものとして配置されていく。こうしたことから身体美文化が、完全に「アメリカ」に擬態するものではなく、アメリカと日本という二つのコンテキストの中を揺れ動きながら新しい主体を立ち上げる文化として生起したことがわかる。

身体美文化は、戦後社会において「日本人」を再び人種化する物語を構成するものとして生起した。しかし、その形成過程においては、その物語を乗り越えようとする人々のうねりがあった。その乗り越え方は、肉体の次元での人種的劣等性に立ち向かうというものでは必ずしもなかったが、身体美というものを通じて身体に対する悲観を拭い去り、家父長的かつ人種的な抑圧に閉じ込められた身体を解放し、戦後という新しい時代を生きる主体を作り出そうとするものであった。第5章と第8章で確認した女性解放運動家たちの語りや、三島由紀夫のボディビル実践とその後の行動は、まさにそうした抑圧された身体を解放する実践であり、同時に、その重要性を他者へと積極的に語りかける実践であったと思われる。

身体美文化は、一面的には文化帝国主義的な権力関係から生起したものとして捉えられるかもしれない。しかしそれは、占領期の日本という「『中間地点の』空間」(Bhabha, 1994 = 2005, p.2) から生起したアンビバレントな文化であり、新しい主体を立ち上げる言説を誘引する文化空間であった。むろん、それが「身体美」という可変性に富んだ記号をめぐる文化であったこともさまざまな言説が引き寄せられる原因となっていたと思われるが、いずれにせよ、リアリティのある人種体験がもたらしたこの文化は、戦後を生きる人々の歩みを方向付ける一つの試金石となったと考えられる。